

東日本大震災

大川小訴訟 「残念で悔しい毎日」 6遺族、意見陳述 控訴審初弁論 /宮城



毎日新聞 2017年3月30日 地方版



控訴審の第1回口頭弁論を終え、記者会見する原告団の遺族ら＝仙台市青葉区で、喜屋武真之介撮影

東日本大震災の津波で児童74人と教職員10人が犠牲になった石巻市立大川小学校を巡り、児童23人の遺族が市と県に損害賠償を求めた訴訟の控訴審が29日、仙台高裁（小川浩裁判長）で始まった。震災から6年。遺族6人が法廷で意見陳述し、癒えることのない我が子を失った苦しみを訴えた。【百武信幸、本橋敦子】

「娘の亡きながら冷たい海の底で魚についばまれ、痛い痛いと言っているんじゃないか。今

でもそう思わない日はありません」

大川小6年だった長男堅登（けんとう）さん（当時12歳）、4年だった長女巴那（はな）さん（当時9歳）の似顔絵を貼ったファイルを握りしめ、鈴木実穂さん（48）は声を震わせた。堅登さんは遺体で見つかり、巴那さんは今も行方不明のまま。 「今後、学校管理下で同様の事件が起きた際、私たちのように泣き寝入りする親が現れることがないようにこの裁判で良い前例を残したい」と訴えた。

3年だった一人娘の香奈さん（当時9歳）を亡くした中村次男さん（42）は「おかげ一つ、カーテン一つにしてもまずは香奈の意見が一番でした。今、娘がいれば今年高校1年生。残念で残念で悔しい毎日です」と声を詰まらせた。6年だった長男大輔さん（当時12歳）ら3人の子供を津波で亡くした今野ひとみさん（46）は、不妊治療の結果、授かった子供を流産してしまったことに触れ「今の私には何も残っていません。心も体も空っぽ状態です」と涙をこぼした。

裁判後の記者会見で、5年だった次女の千聖さん（当時11歳）を亡くした紫桃隆洋さん（52）は「先日の雪崩の事故でも、子供の命を考えればやはり（講習の実施は）やめるべきだった。命の大事さを学校場で考えていく必要があると思う。大川小で起きたことの法的判断が、学校防災の取り組みを考えていくことにつながれば」と力を込めた。

一方、石巻市の亀山紘市長は「控訴審でも県と協議しながら真摯（しんし）に対応したい」、宮城県の村井嘉浩知事は「県として主張すべき点についてはしっかりと主張しながら裁判を進めたい」とコメントを出した。